

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 附属中学校・教諭

氏 名 岩下 温美

研究期間 令和3年度

研究プロジェクトの名称	ICTを活用した「考え議論する」道徳科の課題設定について
研究プロジェクトの概要	<p>1. 研究の背景</p> <p>2018年度から小学校で、2019年度から中学校で始まった特別の教科 道徳は、「道徳教育の要」として位置づけられ、その実践は「全教育活動」における「指導」を前提として展開される必要がある。そのため、道徳の指導にあたっては、教育活動全体を見据えた計画と方法が検討され、それらに基づく実践が行われることが期待される。加えて、学習指導要領では「考え議論する」道徳の授業をすることが求められている。小池（2021）は「項目に限定された範疇で授業を展開するのではなく、教材を多面的に吟味し、モラルジレンマを引き出して、『考え議論する』道徳の課題設定をすることが肝要である」と述べている。また、そのためには、「主権者としてのシティズンシップの育成」が併せて肝要であるとし、現代日本社会の課題を捉えて解決しようとするシティズンシップ教育が道徳に必要だと述べている。</p> <p>また、文部科学省が公開している「道徳教育アーカイブ」においては、特別の教科 道徳向けの授業映像、デジタル教材が掲載されており、道徳教育におけるICTの活用が期待されている。山本（2020）は「黒板からプロジェクターへというような、単なる方法上の置き換えにとどまるのではなく、授業場面や活動内容、あるいは学習内容そのものに即した選択が、他の教科よりも深刻かつ繊細に迫られるもの」と述べている。文部科学省（2020）は、子どもが1人1台のタブレットPCを授業で活用する環境を前提に、端末に自分の考えを入力して他者の考えを共有したり、全体の考えを参照し振り返る中で考えたりする活動を提案している。</p> <p>そこで、本研究では、当校で教科横断的に行われているシティズンシップ教育と道徳の題材を結びつけながら、「考え議論する」ことを可能にする課題設定を、教科書教材を用いた実践を通して模索する。加えて、本校のICT環境を生かし、考えの共有にICT機器や生徒1人1台のタブレットを活用して、子どもたちの意見がより効率的に共有され生徒の思考を促す授業実践を提案する。</p> <p>【参考文献】</p> <p>小池由美子（2021）「道徳教育教科化と道徳教育の指導法に関する研究—『考え議論する道徳教育』の考察—」『上田女子短期大学紀要（44）』，31-42，上田女子短期大学</p> <p>文部科学省（2020）「各教科等の指導におけるICTの効果的な活用に関する参考資料」「特別の教科 道徳の指導におけるICT活用について」 https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_15.pdf（2021/06/30 閲覧）</p> <p>山本 和行（2020）「道徳の指導におけるICTの活用—「特別の教科 道徳」の教科上の特徴を踏まえて—」『天理大学教職教育研究（3）』，21-27，天理大学人間学部総合教育研究センター教職課程</p>

	<p>2. 研究の目的</p> <p>道徳科の授業において、生徒の考えを共有するためにICT機器を活用し、生徒の主体的な思考を促すパフォーマンス課題を設定することによって「考え議論する」道徳を实践できるかを検証する。</p> <p>3. 研究の方法</p> <p>(1) 実施期間：2021年4月～2022年3月</p> <p>(2) 対象学年：中学1～3年生</p> <p>(3) 実施内容</p> <p>年間を通して生徒の実態に合わせて『中学道徳 とびだそう未来へ』（教育出版）の題材を实践し、実践を振り返りながら、「考え議論する」道徳たり得る課題設定について考察する。実践にあたっては、画像共有アプリやホワイトボードアプリを活用し、効果的な使用場面や目的について、記録する。また、リアルタイムアンケートサービスを用いて、生徒の考えを即時で集約し、仲間との意見の共有や、思考の記録・評価に役立てる。加えて、教材を多面的に吟味した課題設定ができるよう、関連書籍を参照して教材研究を行い、協力者を得た研修や、生徒への講話の提供を計画・実践する。</p> <p>研究のまとめとして、今年度の実践の考察をもとに、修正を加えた年間指導計画を提案する。年間指導計画には、評価の視点や材料を位置付け、指導の内容において教師と生徒のICTの活用場面を併記する。まとめた研究の成果は来年度実践に生かすとともに、積極的に他校との共有・発信を図る。</p>
<p>研究成果の概要</p> <p>※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。</p>	<p>1. 研究の成果</p> <p>(1) 実践の振り返り</p> <p>今年度、第3学年で実践した三つの題材について、成果と課題を振り返り、今後の実践に役立てる。</p> <p>① 題材名「平和のとりでを築くためには～自分の意見をもって相手の立場を想像する～」【C-(18) 国際理解, 国際貢献】 教材名「平和への願い」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【パフォーマンス課題】</p> <p>附属中学校では2年生で平和学習をし、昨年みなさんはT&Qの活動で「Rainbow 平和宣言」を行いました。その宣言を基に、現在の自分の行動を振り返り、よりよく生きていくために、「Rainbow 平和宣言」を現在の視点から更新します。宣言はクラスの中で改めて述べることにします。</p> <p>その際、道徳的な視点から、自分と異なる考えや思いをもつ人や異なる文化的背景をもつ人との関わり方に着目して、今の自分ができる具体的な行動を考えてください。</p> </div> <p>生徒は本題材を通して、平和的共存のために自分ができる行動について、登場人物や仲間のそれぞれの立場を理解しながら、話し合いを通して考えを深めていた。また、多様な他者とともに生きるために大切にすべきことについて、「僕」の言動について考える中で、自らの経験や学習を生かして捉え直している姿が見られた。パフォーマンス課題を含む本題材の学習活動を通して、「平和とは、全ての国々の万人の心の内で模索し続けるべき道徳的課題の一つである」という本質的な</p>

理解に迫ることができた。また、自分の行動を具体的に考えることで、平和は実現が難しいものではあるが、日々の生活の中で自分が貢献できることがあると気付くことができた。題材全体で自己調整に着目した手立てを講じたことで、生徒は自己調整のサイクルを回し、題材のねらいを達成できたと言える。

一方、本題材の課題として、平和のために自分ができることについて考えた際、具体的な行動でなく内面的な意欲に留まる記述があったことが挙げられる。例えば、パフォーマンス課題に対して「大切なのはお互いが寄り添うことではなく、お互いの共通点を重ねた上で異なる意見に理解をすることだ」と考えたが、その思いを具体的な行動として宣言することができなかった。理想とする姿を、実践可能な身近な行動につなげることに困難があったと考えられる。

このことから、生徒が自己調整のサイクルを回してよりよい問題解決ができるよう、生徒の日常に近い場面設定で、思いを動作化する役割演技を取り入れるなど、準備試行ができるような手立てを講じ、実際に言葉や行動にすることを意義を見だし、思考と自身の行動を結び付けて考える機会を作る必要があると言える。

② 題材名「自分と未来を変えるには～不確かさや恐れと向き合う方法～」【B-(11) 公正、公平、社会正義】

【パフォーマンス課題】

30年後、新たな感染症が流行し、人々が不安や混乱の中にいるとき、あなたは自分の子供にどんなメッセージを送りますか。現在の自分の体験と、授業の中で考えたことを踏まえて、子供たちがよりよく生きられるようアドバイスを伝えましょう。

本題材の学習で、生徒は事例の当事者の経験を基に被害者の視点に寄り添って差別について考えたり、仲間と意見を交流させたりすることを通して、差別される辛さを共感的に捉えることができた。生徒の「自分を守るために差別をしてしまっている」という発言や、「差別はいけないと分かっているながらも差別は起こっている」という発言から、差別をしてしまう側の思いや自分自分の差別心とも向き合いながら課題に取り組んでいたことが分かる。また、差別の解消のために集団で協力してできることはないかという視点で、自分たちができる行動を考えることを通して、個人の行動から考えを広げ、社会正義の実現に向けて思いやりの心をもつことや、差別や偏見を許さないという姿勢を共有し、共によりよい未来を創っていく努力をしていこうとする意欲を高めた。

題材を通して自己調整に着目した手立てを講じたことで、生徒は自己調整のスキルをサイクルとして回し、題材のねらいを達成できたと言える。

一方、本題材の課題として、自分のこととして考えることに困難を感じる生徒の姿が見られた点が挙げられる。例えば、「差別の被害を受けた当事者でない自分たちが『差別をしてはいけない』と子供に説得力をもって伝えることはできるのか」という問いが出されたように、自分の立場からメッセージを伝えることに疑問を感じる生徒もいた。このことから、本題材のように現実の問題を扱う場合には、生徒

が自己調整のスキルをサイクルとして回してより具体的な行動や自己実現につながる目標設定ができるよう、生徒の立場により近い教材を扱った活動を位置付けたり、実際に講演を聞く体験活動の場を設定したりするなど、生徒の経験知を補い議論の土台を整える手立てを講じる必要がある。

③ 題材名「国境なき医師団の活動から学ぶ」【D-(19) 生命の尊さ】

【パフォーマンス課題】

講演を聞いて、知ったこと・分かったこと・考えたことをまとめ、これから自分はどのように行動するかを具体的に宣言しよう。

本題材では、国境なき医師団のアドミニストレーターを12月まで勤めていらした方を講師にお招きして、活動の概要や世界の人道危機についてオンラインでご講演頂いた。講演を通して生徒は、生命を守るための行動には、様々な選択肢があることに気づき、自分の将来についても思いを巡らせる機会となっていた。生徒の記述から、「自分たちができることがあるということをお忘れないように意識して日々を過ごしていきたい」や、「普段の何気ない会話で話したりして、国境なき医師団の活動をもっと詳しく知り、広めていきたい」、「新たに知った事実や、思ったことを周りの人に伝えていき、自分がすべきことを積極的に探すということなら今からでもできるので、そのような活動に自発的に参加するための行動をしたい」といった小さな一歩を踏み出す意欲が読み取れた。

本校の研究仮説に迫るための手立てである「多様な価値観をもつ人々と接したり対話したりする活動の場の設定」により、道徳科の本質に迫る学びを実現することができた。質疑応答の場面では、代表生徒の発言から、一方的に講演を受け取るだけでは得られない、生徒の実態に合った学びが展開されていた。

本題材の課題として、講師との出会いの場や、個人で深く考える時間を確保することはできたが、時間の制約から生徒同士で学びを共有し、「考え議論する」活動を位置付けることができなかったことが挙げられる。前述の実践の課題であった議論の土台を整える活動の後、どのような手立てを講じて生徒の話合いを促すかを来年度の実践で検討していく必要がある。

(2) 研修の学び

まん延防止等重点措置下の状況であったため、オンラインで以下の研修に参加した。

① 千葉大教育学部附属中学校 ICT 授業研究会

研究主題「1人1台端末時代に求められる情報モラル指導法の検討～デジタル・シティズンシップの視点から～」の下、道徳と国語の実践が公開され、協議会と講演会が実施された。研究の概要としては、デジタル・シティズンシップの定義を情報モラルと比較して捉えていた。これまでの指導では、情報モラル教育は技術科で、シティズンシップ教育は社会科で取り組まれていた経緯があり、それぞれの教科を中心として研究が進められていた。教材選定に当たっては、ポジティブに、様々な視点から考えられる教材を重視し、第三者の視点から「ど

うするべきか」を考えさせていく展開が構想されていた。複数の選択肢や要素を検討し、最適解を見いだす過程を成立させるため、必ずしも解答が一つに収まらないような教材といった選定の視点が提示されていた。当校でも導入が検討されていた DQ World 活用の事例も示されていた。研究1年次の発表であり、全校体制でカリキュラムを創ったり、指導法を確立したりする取り組みは次年度の研究として継承されるとのことだった。

協議会では、授業者からの授業に関する説明が国語・道徳の順で各10分程度あり、その間チャットで質問を受け付けていた。国語と道徳が同一の会になっていて、質疑が国語に集中していた。道徳では、「社会参画」の内容項目に関連付けて、指導されていた。身近な交友関係に問題意識が留まり社会に目を向けたシティズンシップ教育につなげていくことが課題として挙げられていた。自分事として考えるベクトルとの対比が重視されていることが感じられた。

講演会では、岐阜聖徳学園大学の芳賀高洋先生のお話を伺った。デジタル・シティズンシップ教育はESDとの親和性が高いとお話があり、SDGsに着目した当校の教育内容とも重なる部分があると感じた。また、優れた教材として「消費者センスを身につけよう」(消費者庁)が紹介され、情報を発信することには「責任」が伴うことが協調されていた。今後の教育の課題として、価値観は人によって違い、対話の重要性が高まっていることが指摘され、多様性の理解を前提に寛容を育む指導が求められることが示されていた。

② JICA 開発教育・国際理解教育 実践報告フォーラム 2022

開発教育指導者研修の受講者による、実践報告と実践体験ワークショップで構成されたオンラインフォーラムに参加した。研修の中では「肯定的に出会う」、「同一性、つながりに気付く」、「課題について共に考え共に越える」という三つの項目を大切にフィールドワーク等に取り組みされていた。

実践報告では、33名の先生方の発表を、五つの分科会に分かれて、7回のセッションでお聞きすることが出来た。教室の中の多様性を生かした実践や、地域の方々とつながる実践、JICAの各都道府県のデスクとつながる実践など様々な提案性のある授業の成果と課題を知り、開発教育・国際理解教育の手法への理解を深めることができた。英語科や国語科など教科の内容と結び付けた実践や、大学や高校での実践の様子についても知ることができ、中学校の道徳科だけではない幅広い視点から実践を考える契機にもなった。

ワークショップでは、二つの分科会に分かれて2回のセッションが行われた。「買い物は投票することだ」では、小グループで家族となって、設定されたメニューの中から献立を選択することを通して、世界の食糧問題について考える活動を行った。それぞれのメニューがフードマイレージや、環境負荷などの食の問題と対応していて、自分たちで選び取った責任感からより当事者意識をもって問題と向き合うことができた。「ステキなシェアハウス～みんなが生きやすい社会をつくろう～」では、小グループでそれぞれのメンバーの得意や不得意を共有し、お互いに住みやすいシェアハウスのルールをソフト面とハード面から話し合う活動を通して、生きやすい社会について考えた。ステレオタイプは差別につながることや、対話の重要性に気付くことが

	<p>できた。いずれの活動でも「考え議論する」必要性が内包されていて、話し合うことで学びが深まる実感を得ることができた。</p> <p>(3) 研究の成果物 今年度の研究成果を来年度の年間指導計画としてまとめた。</p> <p>2. 今後の課題</p> <p>実践を通して得た課題として、道徳的実践意欲を具体的な行動に繋げること、社会の問題を自分に引きつけて考えること、「考え議論する」必要性和場面を題材に位置付けることがある。来年度年間指導計画に沿って、これらを解決するために、次の手立てを講じる。</p> <p>①生徒が自己調整のサイクルを回してよりよい問題解決ができるよう、生徒の日常に近い場面設定で、思いを動作化する役割演技を取り入れるなど、準備試行ができるような手立てを講じ、実際に言葉や行動にすることの意義を見だし、思考と自身の行動を結び付けて考える機会を作る。</p> <p>②生徒が自己調整のスキルをサイクルとして回してより具体的な行動や自己実現につながる目標設定ができるよう、生徒の立場により近い教材を扱った活動を位置付けたり、実際に講演を聞く体験活動の場を設定したりするなど、生徒の経験知を補い議論の土台を整える手立てを講じる。</p> <p>③「考え議論する」必要性が内包された活動を展開し、内容項目に対する気付きを深め、対話の重要性を体験的に理解することが出来る場を設定する。</p> <p>加えて、来年度は当校の研究主題「A I 時代を主体的・共創的に生き抜く生徒の育成～自己調整，創造性，人間性に着目して～」の第4年次研究として人間性に着目した実践を進める。道徳科では、生徒が現状の課題を認め、よりよい姿を目指そうと自ら問いを立てて思考し続けようとする姿や自分と他者の考えを尊重し、解のない問いへの納得解を協働しながら導き出そうとする姿を大切に指導していく。そのために、生徒が実感をもって考えられ、思考する過程で問いが生まれる課題の設定や仲間と共に考え、社会の一員として自分たちがどのように行動するかを議論する場の設定を手立てとして講じる。</p>
<p>研究成果の発表状況</p>	<p>当校のオンライン教育研究協議会にて、授業を公開し、パフォーマンス課題の内容や実践の成果について、道徳科の協議会にご参加頂いた約 80 名の方と協議した。また、当校紀要及び実践事例集に成果と課題をまとめ、発行した。他県との行き来が難しい状況から、計画していた日本道徳科教育学会での発表は実施しなかった。</p>
<p>学校現場や授業への研究成果の還元について</p>	<p>当校の年間指導計画として研究成果をまとめた。来年度、研究主題「A I 時代を主体的・共創的に生き抜く生徒の育成～自己調整，創造性，人間性に着目して～」の第4年次に当たり、校内研究のまとめとして年間指導計画を公開する予定である。</p>